

望む！ 適切な産院情報

松田 博美

「産科・産院情報BOOK」編集者

4年ほど前のことです。はじめての出産を控えた私は、当時創刊の続いた妊産婦向けの雑誌を愛読していました。「へえー、4か月で赤ん坊は10センチかぁ」「貧血防止にはカツオのガーリックソテーかぁ」などなど、それまでの生活にはまったく関係のなかった未知の世界への窓口として多いに楽しませてもらったものです。もっとも、この手の雑誌では出産のときの鮮血したたる写真さえ、ファッションブルに洗練させてしまうところが恐ろしくもありました。

そして、今ひとつもの足りなさを感じたのは、出産入院の体験手記でした。「夫とともにラマーズ法で産みました」「助産婦さんの母乳管理で大成功」「家族部屋のある病院」といった記事や手記は、なるほど納得はさせられますが、現実目を見るとそんな助産婦や医師、そして産院との出会いは宝くじに当たるような偶然に頼るところが大きいのです。たとえば雑誌や本で「これだ!」という産院をみつけても、実際の産院選びとなれば、通いやすい近所の施設をあたるのが一般的です。そのとき、自分に合った産院を探し出す目が私たちには必要です。よくいわれるように「出産は人任せにしない態度が望ましい」からこそ、産院を選ぶとき患者は多くの情報を得てしかるべきだと思うのです。今、医師と患者の関係を語るとき、インフォームド・コンセントをぬきにしては進みませんが、こうした互いの関係性ととも、私たちの身近にある医療施設の個別な情報を公開していくシステムが必要ではないかと、妊産婦向けの雑誌をめぐりながら考えたものでした。

医師法により医療施設の広告や看板は厳しい制

限がされている現在、病院によっては独自にパンフレットなどを作って、院内の案内や自分たちの医療への取り組みや姿勢について明確にしているところもあります。しかし、そうした試みをしている病院を探すにはコレまた大変な労力が必要で、医療施設の広告や看板の制限は、患者にとってどのような利益をもたらしているのか疑問です。看板や広告がその施設の一面しか伝えないというのならば、保健所や図書館などで閲覧のできる資料やリストを公開する方法もあります。

今年3月私は『東京・近県 産科・産院情報BOOK』（ジャパンマシニスト社刊）という本を作りました。東京・神奈川・千葉・埼玉・茨城・栃木各県の出産入院を可能とする産院・助産院約1400件にアンケート取材を試み、108件の回答をまとめたこの本は、刊行からしばらくしてある新聞の家庭欄で紹介されました。反響は予想をはるかに上回り、出版社の電話は鳴り続け、数日で2000人を超えるプレママとおぼしき人々からの問い合わせが殺到しました。

交通機関・分娩費用・母親学級の有無(その内容)・夫の立ち会い分娩・ラマーズ法等々、21項目の質問に医師や助産婦が直接回答しているこうした情報を、読者の多くは自分自身のお産をイメージする参考書として読み、もっと多くの回答が集まることを望んでいることが、出版社に送られてくる読者カードからも読み取れます。

今回の出版は、まだ小さい胎児の鼓動のようでもあります。その音をききつけるトラウベを持った人々が多いことを信じて、新たなシステム作りのきっかけになればよいと思います。